琉球大学学術リポジトリ

# 羅布桑却丹著『蒙古風俗録』（五）



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学教育学部 |
| | 公開日: 2010-10-13 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 辻, 雄二, Tsuji, Yuji |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/18230 |

# 羅布桑却丹著『蒙古風俗録』（五）

辻　雄二　訳

## 第三十八章　営業生計

古代以来牧畜を生業とし生計を営んできた。牛や馬羊を随え、四季の水と草を求め各地を移住した。家畜の多い家は牛数百頭を一群として、貧しい者に分け放牧させる。したがって貧しい者はみな富裕な家から分けられた家畜を放牧し、それをもって生計と為した。このような富裕な家がおこなう家畜の分け方には規則がある。たとえば預った牛などが死傷すると、主人にその皮を渡して証拠とする。また他に家畜の繁殖にも規定がある。産まれた牛百頭につき二頭を、放牧を担う家の所有とし、羊百匹ならば四匹を放牧する者に与える。そして放牧する者は乳牛が子牛を産めば、バター二斤と、厚さ一寸長さ一尺、大きさ五寸ほどのチーズ二塊を主人に納める。羊の場合は羊毛織などを主人に渡し、女たちは牛乳を搾乳しバターとチーズを作り、乳牛の数に相当する分を主人に送る。そのほかにバターとチーズが残れば、すべて放牧する者の所有となる。このような規則は蒙古各地で通用し、貧しい者はみな富裕な家の家畜を放牧することで生計をたててきた。

このように貧しい者は放牧によって生計を為すため、有名な富裕家の家畜を分ける話があると、旗外の者であろうと遠くから来て、それを分け与えて貰う。したがって蒙古の富裕な家の家畜は遠近を問わず、みな貸し出される。この放牧にとって何より大切なことは草と水を捜すことであり、そのためには常に移住して草と水を見ることが大事である。そしてそれに通じた放牧者が最も重視される。放牧者は激しい馬に乗れ、群の管理にも経験がある。また地勢に明るいから、放牧をおこなう家はみなこのような放牧者を重用する。このような放牧者は蒙古語で「阿都其」という。一般的には馬管とも呼び、文字通り群を管理する者である。この阿都其を雇う雇用代は家によってそれぞれ異なるが、一等の阿都其は一年の賃金が良馬一匹と大きい牛四頭である。このように有名な阿都其は年老いた後も、家畜について識見が深く、病気や繁殖についても明るいことから、蒙古で放牧をおこなう家は阿都其の経験を非常に尊んできた。

このように蒙古では牧畜を営むがゆえに、貧困な家は常に家畜の群に随って移住し、家屋を重視することはない。また裕福な家であっても牧畜の様子を一つ一つ調べて回るために私産を持って移住する。したがって、貧富の差は外面から伺い知ることはできない。そして富裕な家であっても阿都其を雇うことができない時には、家の男女が順番で牛や羊の放牧に当たる。

蒙古の人々は、元々米と麺類を主食とすることは少なく、専ら牛肉や羊肉、乳茶を食した。そしてふだんは野菜類も全く食べない。唯一土地で獲れる米穀の一種を炒米と呼び慣わし、それ以外の各種食物はみな外来である。また蒙古人の老若男女の礼服は、すべて自家製の牛皮や羊毛で作られる。このように牧畜を生業とすることで、日常の生活費はたいへん少なくて済む。そして各地の蒙古人は、一戸あたり平均十数人の家族で構成され、牛を二、三百頭、羊を一千匹余りを飼育している。このような家産があれば、生活は十分満たされる。しかしかつて古代におい

ては、この程度の家産を持つ家は貧窮とされ、蒙古で富を主張する時には、牛・馬・羊の群をそれぞれ幾湾と数え、幾千とか幾万などの数で言い表すことはなかった。

後に清朝康熙年間になると、長城以内に住む人口は稠密となり、また度々災害に見舞われたことから、朝廷は被災者を救済するために、人民を借地に移民させ、耕地を開墾し米穀を栽培し生計をたてさせる方法をとった。まず強制的に卓索図盟と哲里木盟等の旗以南から長城外側に至る広大な土地を借地とし、そこに大量の村をつくり、街道には通用門を立て地租を納める関所も建てた。以来毎年多くの人が移住し、人口が膨張し、数年もたたぬうちに長城内からみな外へと移り、土地を借りて耕作をおこない、秋に収穫した米や豆、野菜など決まった量を蒙古人の地主に納めた。蒙古人は荒れ野を人に貸し品物を得られたことをたいへん喜んだ。そうして通用門近くに住む蒙古人も互いにそれを真似て、以来私有する土地を漢人に貸して地租を取るようになっていった。それは同時に蒙古人が農耕を知った始まりでもあった。これは清の康熙年間の初めのことで、乾隆年間に至ると蒙古の卓索図盟や各旗の耕地はほとんどが開墾された。清朝は熱河承徳府を設立し、管轄下の各旗の開墾された土地に庁署を一ヶ所設立してそれぞれ地租を納めさせた。また数条の規則を作り、蒙古人の年毎の地租を記録し保存された。そして開墾地のある旗では旗主が地租局を設立して、年末から立冬の月までを地租を納める期間とした。旗に住む者のうち、所有する土地の多い者は耕作を生業としたが、放牧を好む者は開墾地のない旗へ移り、放牧を生業とした。

しかし開墾地に住む蒙古人も、初めは耕作の仕方が分からなかったために、土地を漢族の人に貸し耕作するのを見て、秋になって収穫できることを知り、それ以来農耕を生業とするようになった。そして清朝咸豊年間には、開墾を早くから始めた者の中には困窮する者も多かったが、次第に耕地の有益さを理解し、卓索図盟の蒙古人には二、三百頃の土地を持つ裕福な者もおり、以来農耕による利益が甚大なものとなっていった。このように蒙古人が耕地を開墾し利益を得始めたのは咸豊年間のことである。元々蒙古人は農業のことを知らず、清朝咸豊年間に初めて農業が始められた。古来自然に依拠した牧畜を生業とし、牧畜を保護するために要路に巡防所を設置していたことから、各地の地名に某々営子という所が数多くある。それが開墾をした後も、原名を改めずに某々営子として村名となった。また村名に窩堡という所もあるが、それは開墾を始めた時に農夫たちは草屋を建て住み、以来李姓の者が住んだ所を李家窩堡と呼び、張姓が住んだ所を張家窩堡と呼ぶようになった。つまり窩堡は当初開墾期に造られた草屋を意味したが、後に村の名となり伝えられたものである。

蒙古では清朝光緒年間に至って、内蒙古東四盟では開墾が流行って以来、次々と荒れ野を開墾し漢人を招き入れたことから、次第に牧畜の優勢が見えなく、ついには牧場が無くなっていった。それはかつて牧畜を営んでいた家もみな土地を耕地に改めたからで、以来土で築かれた家に住むようになった。そして民国の改変によって、蒙古各旗の旗主は時代の流れに乗った。しかし規範は変わらず守旧され、土地を売って開墾しようとする旗の旗主は中国政府に報告して指示を願い、範囲を指定して人々を招いて開墾させた。このように開墾の進められた所は蒙古人もみな耕作を習い農業を営むが、開墾地のない所では旧習に依って牧畜を営んできた。しかし旧習を改めることもなく開墾もされない所では、牧畜を営んでも家畜は増えず、年来の天災も重なって一向に良くならなかった。また開墾し農耕をおこなった所でも富みが見えるわけでもなく、それでも蒙古人はみなそれを天命だと思い、新たな改良を試みようともせず、一切のことが決められていると思う習慣が、業の営みの実状である。

蒙古人は最初に耕地を漢人に貸した時、土地を上地・中地・下地の三種に分別した。そして地租の値には金銭と現物の二種類があり、種別によって上地は一畝あたり米二斗半の租糧で、このような規則は漢人向きであった。

## 第三十九章　交通貿易

古代蒙古の人口も多くなかった頃、貿易品はみな西蔵からもたらされた。後の唐朝時代、蒙古に額魯特国が隆盛を誇った時、唐朝商人の往来や両国間の貿易が盛んとなった。その頃の蒙古は良馬を産出するがゆえに、蘇州商人は蒙古各地へ足を運び、絹織物や糸、鋏、針、砂糖、茶などの荷を蒙古の馬と交換していった。毎年春から冬までの定まった時期に蘇州の商人は貿易をしにやってくる。春二、三月には蒙古に到り、冬十一月頃に国へと還る。関所には両国の巡視節度使がおり、行商人は蒙古に入境するに際し、まず節度使に報告して両国の通行許可証を貰い受け、行商人の身分を証明された後蒙古へと入る。この節度使の証明がなければ蒙古国に入ることはできない。特に蒙古国の関所長官は通行に甚だ厳しく、そのために行商人が各関所で支払う費用は非常に重いものであった。その頃の蒙古では蘇州の品物と楊州の品物が最も重宝とされていた。このような貿易状況は宋朝まで続き、元朝になってからは北京と通州の品物へと代わっていった。このような風習は今も呼称として伝えられ、蒙古では一般に商売することを、みな楊州商売、蘇州商売などと言う。これも最初に行商にやってきた商人が楊州と蘇州から品物を運んできたからで、商売人と言えば楊州あるいは蘇州の者と認められていたためである。後の元朝になると、蒙古で行商をする者は山西太原府の商人が最も多くなった。

この頃の蒙古各地の辺境巡視は厳しく引き締められており、行商人はみな両国の通行許可証を持って蒙古の国境を出入りした。行商人はみな商号をもち、或者は大徳とか大徳裕などといった。それらは通常ひとまとまりで商売をおこない、一つの隊商は数十輌の車から成り、記帳用具やその他の貨物と家具など全てを車に載せて、蒙古の各地を移動しながら、牧畜を営む風習に随って一緒に行商をおこなっていた。また商号を持つ店はみな大きな商家であったが、蒙古で行商する商人は一切礼節を蒙古の風習に従いおこなったため、蒙古人の心意に甚だ合致し、商人もたいへん多くの利を得た。山西太原府の行商人は胥海や蘇尼特喀爾喀大庫倫などの地方でも商売をし、蘇州の行商人は喀喇沁、科爾沁から喀爾喀東部車臣汗までの地域で行商をおこない、いずれも冬になるとみな国へと還っていった。この行商をおこなうには規則がある。当年に限った一年だけの許可証明書が、両国の節度使の所に各自記した帳簿となっており、商人たちはみな期限になれば還らなければならない。さらには蒙古は冬になると非常に寒くなり、移住もできなくなるため、商人たちは毎年春二、三月に荷を成し隊商をくみ来て、行商をおこない十一月には帰国するのである。また蒙古の関所も各部落の規則も商人が許可無く定住することを厳しく禁じていた。

そして清朝に至り、蒙古の風習に近年来の改変がおこなわれた。蒙古の規範を定め、内と外に蒙古に分け並べ、それぞれ盟主と旗主を設置し、旗主は定期的に上京し皇帝に拝謁するようになった。こうして盟主は年に一度、旗主は三年に一度上京したため、次第に蒙古王公はみな商人と取り引きをするようになっていた。北京商人は専ら蒙古人と商売をするために蒙古人の人情を見極め、北京の安定門外に大きな店を開いた。それは萬慶號、萬義號、大順號で、この三店は大資本家で、専ら内外蒙古の商務を担い、銀銭の貸借もおこなっていた。清朝以来、こうして蒙古

では北京商人が活躍し、萬慶號と萬義號は隊商を出して、蒙古で行商をおこなった。そして彼らは蒙古の風習に従って会計員を連れ歩き、毎春蒙古へ行き、秋から冬に至ると北京へ戻っていった。

このように蒙古は清朝に属して以来、内政は日々衰え、辺境を守り国の利益を守ることを思い、商人による損害を防ぐことを考える者はいなかった。みなただひたすらに自身の利便を図るのみであった。そのうえ商人としての経験と手腕が最高の者が隊商の経理人となって、まず蒙古へ行商に行く前に蒙古人の好物を幾種類か準備し、蒙古各部の長や旗員へ贈り行商の保護を依頼した。もし相手が旗主ならば、贈り物は倍にもなった。こうして蒙古人は商人からの贈り物を受け取り、感動し誠意をもって行商人を保護しようとした。彼らは商人を親友と同じくし、その交際にも偽りがないと思っていた。その結果、内外蒙古の西部各地方には、北京と張家口の商人が行商貿易をおこない、内蒙古東部の各旗では山海関の外から錦州商人が隊商をくみ荷を運び込み貿易をおこなった。商品には白布、糖、茶、糸、針が最も重宝され、絹織物などはその次で買い手が少なかったのは、綾絹などが重宝されなかったためである。そして商人達は蒙古から帰国する時、交換した牛や馬・羊の群とその毛皮を車に載せ、国に戻ってそれらを売り捌き銀銭とする。商人の一年はこうして終わる。蒙古の営みを支える生業は牧畜であり、草と水を追い求め移住したため、商家が定住できるような街も街道もなかった。

清の康熙年間には、北京の商家であった萬慶號や萬義號は、蒙古王公に金銭を貸し出し、蒙古との貿易も年々増えていった。蒙古王公が上京した後、経費が不足すると、みな萬慶號と萬義號に行き借金をし、蒙古各旗の旗主は北京の商人と緊密な関係となっていった。そして外蒙古は甚だ遠く、交通も不便であったため、萬慶號と萬義號は合同で外蒙古の庫倫に分店を設立することを提案した。以来庫倫は一大市場となり、商人がたくさん集まった。こうして外蒙古各旗の者はみな近くの庫倫へ行って貿易をするようになり、そこを京荘と呼ぶようになった。このように北京の商家は蒙古に行くと大商と呼ばれ、蒙古人も北京の品物を好み買い求めたことから、蒙古に行く北京の商家はたいへん多かった。

清の乾隆年間、察哈爾地方は駐京した胡爾克図喇嘛の納涼避暑の地であった。そこには官廟を数ヶ所建て、喇嘛廟と呼ばれた。またそこに市場が設立され商人が集まるようになると、東西蘇尼特及び察哈爾の八旗の人民はみな喇嘛廟へ行き買い物をしたため、喇嘛廟市街の商売もたいへん盛んであった。

このように蒙古で市場が開設されたのは、乾隆年間が最も多かった。卓索図盟では開墾が進み、平泉州建昌庁が設置され、大きな商店が建てられた。昭烏達盟も開墾され赤峰庁を、巴林旗では烏丹城が設立された。いずれもみな大きな商店が軒を連ねるようになった。後に咸豊年間に至り、東哲里木盟では開墾の進んだ土地に数十ヶ所の州と庁を設置し、いずれにも商人がいた。以来、蒙古で庁と州のある所では行商人が居なくなり、開墾されぬ土地も無くなり、行商が次第に珍しくなっていった。

後の光緒年間、昔年開墾され庁と州を設置した所を全て県に改称し、それ以外の新しく開墾され、開放された所を随時鎮という行政単位に編入し市場を作り、そこに集まった商人は全て漢人であった。昔から蒙古人は商売に明るくなく、またそれを好まなかった。そして牛や馬、羊を品物と交換したが、貿易の意味は不明のままであった。土地のある者は耕作で生計を立て、放牧をする者は家畜の繁殖により生活を為した。蒙古は従来貿易を生業とせず、ただ天然に産するを信じたがゆえに、実業が発達することはなかったのである。

昔、蒙古で開墾が成されなかった時、随意家畜の群を移し、草や水が豊富であれば、家畜も甚だ豊かであった。ゆえに商人以外に銀匠や鉄匠、

皮匠、毛布匠などの職人が、毎年春には蒙古に来て、著名で裕福な家の助けを得て仕事をした。この諸職の中では銀職人が最も利益をあげるが、それは蒙古の婦女が銀を髪飾りや首飾りにするからである。そのため銀職人は蒙古では上等職人と呼ばれるが、みな関内出身の者で、冬になり故郷に戻る時、飾り物を作って貰った家の主人は、購った量に合わせて牛や羊を対価として職人に渡した。ゆえに蒙古から関内へと戻る職人は馬や牛を連れて還るのである。このような商人あるいは諸職人は、蒙古に春に来て冬還ることを繰り返し、ずっと往来が続いたのである。昔から蒙古で商売をしたり職人がすることは全て同じ状況で、行商貿易交通いずれも今も変わらぬ風俗である。

そして蒙古王公が困窮の害を受けるようになったのは、北京で借財を重ねたためである。年を重ねれば利子も沢山膨らみ、元金と利子を返すために業の基であった土地を開墾のために売り払い、借金の返済に充てた。それは蒙古人民の生計荒廃を助けるためではなかった。蒙古人来歴における貿易行商の情況を慎重に見て察すれば、ここに至る百年の現象が商戦であったことがわかろう。

## 第四十章　古語傳説

昔より年長者はよく家で傳説俗語を語った。古代の出来事を話し、その由来と意味を若者と幼児に伝えた。そのため人々はこの伝えられた古語傳説を互いに語り合うことが日常であった。

蒙古人の年長者が常套語としたものは、

鶏が夜更けに鳴けば、必ず争い事が起こる。

野良猫が家に入れば、災いが来る。

犬が突然吠えれば、狼が村に来る。

浄き水と火を敬えば、諍いは起きない。

老いに至らねば、捨てられない。

紅にまみれれば紅となり、黒にまみれれば黒となる。

失馬は探し尋ねられるが、失言は戻らない。

水深ければ魚あり、財富多ければ力となる。

鶏鳴けば夜は明け、五十歳過ぎれば老いとなる。

家に居る賢人であるより、愚人であっても旅にあるが良い。

世にあって慮らず、時を得て慎まず。

幼き時に多くを学び、壮んな時に大いに行動する。

窮すれば富を惜しみ、死すれば善きを思う。

失う物あれば得る物あり、来る物を大事に去る物を惜しまず。

大口で丸呑みすれば喉につかえ、小口でいつも吸えば良い。

死に去れば屍となるが、この世に名誉は留まる。

心に生き信じ疑い、自ら善悪を造る。

禍福を尋ねず、富貴浮き雲の如し。

このような俗語が蒙古の各所でみなに通じている。そのほかにもまた古代より口伝の小説が諸々残されている。ここに諸小説の内から面白きものを選び奇言小説を訳し、読者に供したものは左の如きである。

小説の名は『閣思爾図記』である。

大昔のこと、人の子供を食べる貓貓妖怪がいた。専ら子供を喰らい、その被害は甚だ多く、人々はこの妖怪を怖れていた。しかしこの妖怪を捉える術もなく、子供のいる家の父や兄が刀弓を持って子供を守るしかなかった。この妖怪はたいへん凶悪で、いつ来るとも知れず、村人はおちおち寝ることもできず、しかも姿形を変化させることができ、時に老婆に化けて村に現れ、子供を喰うために拐かした。以来この妖怪が子供を喰らう被害が長く続いた。そしてある年のこと、土溝という所で一人

の神童が生まれた。幼名を倆蘇該助魯といい、この童には二人の兄がおり、彼は第三子で、生来自然の法術を備えていた。彼は十二、三歳となった頃、毎日兄と一緒に牛羊の放牧をしていた。ある時二人の兄が腹を空かせると、兄には柴拾いをさせ、彼が羊を殺して調理すると言った。そして二人の兄は腹いっぱいに食べ、いつも満足していた。この倆蘇該助魯が羊を調理する時には約束があった。まず内蔵を食べず、骨と皮を捨ててはならず、ただ肉だけを食べるのである。そして肉を食うにあたって、まず天地を拝み、その後で食べるのである。このように倆蘇該助魯が一人で羊を調理し、食べ終わると兄を放牧に行かせ、彼は急いで羊の皮、頭、尾、骨、内臓を全て元のように組み、そして息を三回吹き込み唱え言をすると、羊が生き返って鳴きながら群に還っていった。以来このように山野で羊を食べることが度々あった。

そんなある日のこと、二番目の兄が両親に、倆蘇該助魯が山野で羊を食べていることを密かに告げ口をした。そこで両親が羊を数えてみると一匹も欠けず全て揃っており、この次男の話を信用せず、次男はこれをたいそう恨んだ。

そしてまたある日のこと、放牧をしている仲間が集まり、みなで一緒に遊んでいた。倆蘇該助魯は、人数が多いので羊では足りぬと考え、その日は牛を焼いて食べることにした。みな牛肉を食べ大いに喜んでいたが、一人次男だけは懐に牛の尻尾を隠し取っていた。そして食事のあと、倆蘇該助魯はいつものように牛皮に五臓、頭、蹄を組み立て、息を吹き込み生き返らせたが、ただ尻尾がないままその牛は群に戻っていってしまった。その夜家に帰ると、再び次男は父に今日食べた牛のことを教え、手にした牛の尻尾をその証拠とした。父親は急いで牛の数を数えたが、牛は全て揃っていた。しかしただ一頭尻尾のない牛がいて、その尻尾の所から滴々と血が流れていたのを見て、父親はこれを次男の仕業と思い、いつも嘘をついていると責め打った。

次男は父に打たれて後、いつも密かに弟倆蘇該助魯の行動を観察し、羊を食べた後におこなう復活の法術を目の当たりにすると、彼が俗人ではないことを知り、それ以来彼の行動に口を鋏むことはしなかった。

そして倆蘇該助魯は十三才の時、子供を喰らう貓貓妖怪のことを聞いた。この凶暴な妖怪は蒙古語では莽古斯というが、この莽古斯が出現して以来被害は続き、子供の手足が野原に捨てられており、子供を捜す親がその屍や手足を見て大いに嘆き悲しんでいた。この話を聞いた倆蘇該助魯は、妖怪を捉え人々の難を取り除けることを両親に告げたが、俄には彼の話を信じなかった。そこで二人の兄が弟の有する種々の法術や、平素山野で起きた不可思議な数々の出来事を両親に説明すると、ようやく両親は彼の力を信じ、倆蘇該助魯に妖怪を捉えてくるよう命じた。こうして倆蘇該助魯は妖怪を捉え人々を救うべく、兄と一緒に妖怪を捜し歩き、ついに莽古斯の居場所に辿り着いた。そこは山の脊梁甚だ険しく、人影もない所で、兄は懼れをなして前に進めぬほどであった。

そこで倆蘇該助魯は兄と妖怪を捉える相談をし、法術を用いずして捉えることはできないと考え、自分一人で妖怪を捉えるので、兄には安心して家に戻って両親の世話をするよう言った。兄には法術もなく、弟と一緒に危険な所へ入れぬばかりか、反対に弟の邪魔にもなる。兄は一緒に危険な所へは行かず、この脊梁の地形を覚え家人に告げることとした。弟は一人といえども失敗は無いと言い、それを聞いた兄は仕方なく弟と別れて帰った。

その後二年の間、倆蘇該助魯は数多の法術を使った。そして名を閣思爾に変えて、いろんな物に変化して妖怪を捜し歩いていた時、遭難した女を救い彼女と結婚した。妻の名は如某諧瓦といい、非常に霊験があり良い法術をもっていた。そしてついに閣思爾夫妻は力を合わせ、莽古斯

を捉え殺そうとした時、莽古斯は十二頭の妖怪に化けた。そこで閣思爾夫婦は陰陽相合を用いて、地支十二門法で妖怪の十二頭を消滅させ、その死んだ所に一座の鎮魔塔を修めた。それ以来人々は彼らの恩徳に感激し、その塔を改修して廟を作り、閣思爾廟と呼んだ。またその廟の地溝の下に一座を築き閣思爾の妻如某誥瓦を祀り、名を改め天仙娘娘廟と呼んだ。かつて閣思爾が妖怪を捉えた所は、今の熱河管轄下の綏東県の地である。平素は小庫倫と呼ばれ、平たい山で脊梁が深い地形である。そこにある喇嘛廟は閣思爾夫妻を主佛として祀っている。このような風俗が伝わるがゆえに、小庫倫の市中では牛羊を屠殺する時、血を食することを許さない。血は全て山溝に捨て去り、それで山川の神の祟りを鎮めるという。

この閣思爾博克達については蒙古語の書物の名ともなり、蒙古人はみな莽古斯の小説も知っている。この話は蒙古達胡国成吉思汗以前のことで、漢の宋朝の初め頃の創られた話である。閣思爾博克達が莽古斯を捉えた物語は、元朝の浩伯来汗の時代に伝えられ、それを青海額魯特蒙古の各伯彦達賴という者が編集し、『閣思爾図記』として今日の世に伝えられた。

〔昔から莽古斯の伝説は有り、今でも蒙古人は子育ての際に、よく莽古斯が来るよと言って、子供が泣くのを止めようとする。〕

唐朝の時、李晋王と呼ばれた者は一万余の兵馬を率いて各地を激しく攻撃し、長城の外に移居して城を築き沙陀国と称し、その大寧城の王となった。以来李晋王は善く民心を得、人々を慈しみ育てた。元々その土地にあった者も問題なく彼の管轄に属したが、この沙陀国李晋王の所轄には胡人がたいへん多かった。

この大寧城から二百余里離れた場所に活爾河という所があり、そこに一人の有名な富裕家がいた。その者は蒙古達胡児族の人で、名を偶賴と言った。彼には下女が数名いて、毎年の春になると下女を山野に使わし、野の菜を摘み取らせた。そんなある日のこと、一人の下女が今日は私たちで嫁入り道具を拵えて結婚の真似事をして遊ぼうと提案した。しかし、みな女性ばかりで、別の女が婿役を誰がするのかと言うと、木葉という女がこういった。ここにある石獅子は雄壮で威厳があるから、これを婿にすればこの世では皆怖がるだろうと言った。そこでまた別の女が、まず誰がこの石獅子の嫁になるのかと聞くと、木葉はみなが携えている籠を獅子に投げ、当てた者が新婦だと提案した。そうして女達が次々と籠を投げていくと、木葉の籠が先に獅子に当った。新婦の木葉は獅子の傍に座り、女達は皆喜び祝い、宴会を楽しんだ。それ以来木葉は毎晩獅子と一緒に眠る夢を見た。果たして彼女は懐妊し、一年余りの後痩せて黄色の顔をした男児を産んだ。主人の偶賴は下女の私生児を貰めず、その訳も詳しく聞かなかった。この子供の名は哈喇戸といった。彼は十二、三の時、主人に羊飼いを命じられいつも羊を放牧していた。ある日、彼が羊に随い山に分け入ると、一頭の虎が現れ羊を捕らえ食ってしまった。哈喇戸は虎を見たことが無く、誰かの母猫がやって来て羊を食べてしまったと思い、虎の頭を押さえつけると酷く殴りつけた。その時丁度虎を追いかけ李晋王がそこにやって来た。そして子供が虎を殴りつけるのを見て驚き、その前に立ち尋ねると、哈喇戸はこの猫に私の羊が食べられ、主人に必ず責められると思い殴ったのだと答えた。そこで晋王が虎をくれるよう賴むと、哈喇戸は生きた虎か死んだ虎かと尋ねた。晋王はそれを聞き、生きたままの虎は人を襲うから死んだ虎をくれと言うと、哈喇戸が両手で虎を持ち、二丈余り遠くへ投げ捨てると虎は死んだ。そこで晋王は郷里を問い、羊を追い立てる哈喇戸と一緒に主人の家へと向かっ

た。そこで晋王は偶頼に会い、事情を説明し哈喇戸を私に貸してくれるよう頼んだ。偶頼はそれを聞き事情を飲み込むと、晋王の勢力を憚りその命ずるままに哈喇戸を晋王に譲った。晋王は哈喇戸を得て、彼を義理の息子とし李存孝と改名した。こうして哈喇戸は母親とともに李晋王のもとで李姓となった。

李晋王は沙陀国王にあって、血の繋がった息子は三人で、他はみな養子であった。李晋王はこの養子を十三太保と呼び、それぞれ兵士数千人を帯同させ沙陀国を守った。その頃長安城内では内乱があり、黄巣が王彦章と共謀して叛乱を起こし甚大な凶行に及ぶと、唐王は密勅として大夫陳敬思を沙陀国に派遣した。李晋王は陳敬思と会談した後、兵を起こすことについて養子等の意見を聞いたが、議論は一致しなかった。特に李存孝と李存剛の二人は胡人出身で、故郷を遠く離れることを願わなかった。そして李晋王が決断を憂い迷っていると、陳敬思は長安の都の美麗と栄華を説き、この沙陀に英雄が埋没するのは惜しい、この機会に国のために賊を討ち功をたて帝業を成すが良いと力説し、太保たちを説得した。これを聞き感動した太保たちは出兵を決め、李存孝を将軍とし副将軍李存剛と陳敬思を一緒に長安へ先遣した。そして全軍が出発するにあたって、李晋王は兵士が国を恋しがるのを防ぐべく、大寧城に火を放つよう命じ、憂いを無くし国に無二の忠義を尽くすために居城を焼き尽くした。こうして晋王の軍隊は長安に向かって出発した。

先鋒の李存孝の部隊が琉璃河に到った時、早速王彦章は沙陀国の兵力の情況を探るために、琉璃河の船隊に紛れ込み偵察をおこなった。そして先鋒将軍李存孝を詳細に見た王彦章は、身長が四尺に足らず、顔色が黄色く躰は痩せ骨皮である姿を見て密かに笑い、先鋒将軍の名に相応しくないと思った。王彦章は長れることなく、李存孝の面前に向かって烈しく言い放った。沙陀国に狼虎の如き勇猛な将軍があると聞いたが、見れば皮と骨しかないではないかと蔑んだ。李存孝はその言葉を聞くや否や激情し、手を伸ばして王彦章の首を鶏か鴨のように掴むと、王彦章は腑抜けとなって命乞いをした。そしてもし投げ捨てるのであれば、船乗りでありながら水が一番恐ろしいので、河に投げないでくれと哀願した。李存孝はその言葉を本当だと信じ、彼を河に投げ捨てた。しかし王彦章は元々水賊であったため、水に投げ入れられると逃げのび、数丈も遠ざかると水中から頭を出し大声で叫んだ。我王彦章は、今より李存孝あれば現れずと言い残し、魚のように泳ぎ逃げ去っていった。李存孝は賊に欺かれたことを悔しがったが、傍らの陳敬思の助言もあって、賊を捕らえることは考えずに河を渡って行った。

こうして長安に着くと、陳敬思は先ず沙陀国の軍隊が到着したことを唐王に報告した。唐王は深く喜び、日を定め自ら沙陀国の兵馬を閲兵した。それには文武官諸侯も参列したが、先鋒将軍の李存孝の体躯が小さく顔色も黄色いその痩せた姿を見て、みな精鋭さに欠ける李存孝を嫌った。陳敬思はそれを見て慌てて唐王に先鋒将軍李存孝を紹介し、体は痩せているが力は強く、後日武術大会で試せばお分かり頂けると申し上げた。唐王はその言に従い後日彼の力を試してみると、確かに相手になる者がいないほど強かった。そして陳敬思は諸臣の疑念を思い、その前で李存孝が武将のもつ鋼で出来た棒を、泥のようにねじ曲げて見せると、諸侯等は口を揃えて、この沙陀国虎将軍の名が偽りではないと褒め称えた。これを唐王は大いに喜び、すぐさま李存孝を先鋒将軍にし、黄巣の賊を捕らえ民を安寧させよと命を下した。李存孝はこの命を受けると、黄巣の賊を捕え功績をたてた。そして李晋王はその功績から唐朝より官位を得、沙陀国に帰らず長安に暮らした。

沙陀国の民は落籍した李晋王の徳を想い、また名将十三太保の威が遥ることを念じつつ、またその十三太保の内にある二人の胡人の驚くばか

りの力強さを想い、村の境界に李晋王と十三太保の名をつけた十三の塚を築き、その側に一つの石獅子を建てた。これは村を保護するべく境界に、依然として十三太保があるが如くという意味である。

これを蒙古語では鄂博と呼び、石で積んだ小山である。このような十三太保の塚は喀喇沁などの地方によくあり、各境界にはみなこのような形状の十三太保の石積みが見られる。それ以外の所には、この種の十三太保の鄂博はなかった。

唐代憲宗帝の時代、沙陀国と呼ばれた所は、現在の内蒙古卓索盟喀喇沁地方である。そして李晋王が城を築いた際に、高さ六十丈余りの塔を建て、大寧城と名づけた。この大寧城の古跡が現在の大寧城地方にあたり、喀喇沁中旗の旗主の管轄に属する。現在でも喀喇沁地方に伝わる風俗として、人々は十三太保鄂博を祀り、山川神社と信じ、毎年春と秋に祭祀をおこなう。そして喀喇沁地方の女性は、子供ができない時、みな十三太保鄂博の石獅子に、子供を授かるよう拝む風習がある。これは後の大寧城共和民国に至っても旧習を改めることなく、熱河に属す平泉県境内の内蒙古喀喇沁中旗には、元々の大寧城が依然として存在する。

古き時代、喀爾喀河地方で蒙古人が集まり巻狩をしていた時、一匹の母狼が三、四才の男子を連れているのに出会った。狩人に囲い込まれた母狼は、子供を守りながら逃げようとしたが、子供が捕えられると母狼は大声をあげ、逃げ去っていった。狩人たちはこの子供を長の家に連れて行き、そこで育てられることになった。名前は狼から得て来た子供であったことから「樓鹿」と付けられた。そして八、九歳になった時、樓鹿は野獣の言葉がよく分かるので、主人は常に彼を連れ歩いた。ある日のこと、野を歩いていると野獣の声が聴こえてきて、主人が急ぎその意味を問うた。樓鹿がそれに答えるには、この山の後ろに大池があり、そこに死んだ牛がいると。そこで主人はその言葉に従い、山の後ろを調べると、確かに池の傍らに死んだ牛があるのを見た。またある年、狐が鳴くのを聴き、主人が樓鹿に尋ねると、静かに狐の鳴き声を聴き、こう答えた。今年は伝染病が流行ると。果たしてその年、家畜も人間も伝染病に罹り、たいへん多くのものが死んだ。こうして主人は樓鹿を寵愛し、親子同然に可愛がった。しかし、樓鹿の出生については詳しく調べても何も判らず、狼の子樓鹿というだけであった。

こうした後、成吉思汗の世に至った時、その派兵に際し主人と樓鹿は兵営に入隊した。主人の名は「朝騰諾顔」といい、入兵後は兵馬の一部を管理した。そして諾顔が、野獣の言葉をよく理解する樓鹿を連れていることもたいへん有名となり、兵士達も毎々野獣の声を聴く度に、樓鹿にその意味を聞くようになった。

ある日の夜半のこと、原野で狼が群をなし激しく吠えていた。樓鹿はそれをはっきりと聴き取ると長官に報告した。今夜半、北から大水が来ると狼たちが鳴いている。水難を避けるために兵営を高い丘に移すようにと。そして長官の命令により兵士たちは丘の高所に移動した。すると夜がまだ明けやらぬうちに大洪水が押し寄せ、低地や樹林はみな水浸しとなった。日が昇り兵士たちはこの大洪水の様を見、驚愕した。みな樓鹿の野獣の声音を聴き取る力に感銘し、また彼のお陰で水難が避けられたことを、口を揃えて誉め讃えた。長官もその特別な能力が有益であることを誉め讃え、樓鹿を重用し昇進させた。樓鹿はそれから永らく策士としてその能力を発揮し、兵営のために尽力した。そして樓鹿は、以来野獣の言葉をよく解し謀を用いたが、ただ一つ虎の言葉だけは解せず、それ以外の野獣のようにはいかなかった。

古くからこのように実しやかな伝説があり風俗を今に伝えているため、蒙古人の子供が野原で遊び、呼んでも家に帰らぬ時に、父母や長兄は「お前は樓鹿ではないのに、なぜ野原で遊び家に帰ることも忘れる。早

く帰らないと、母狼も守ってくれないぞ」と野原に向かって呼ぶ。そして「もし帰らずに遊んでいると、狼や虎が来て食べられるぞ」と言う。このように子供が野原で遊ぶことを戒める話は、みな梭鹿の話である。

蒙古地方は牧畜に依って生業をなし、五穀雑穀を栽培をしなかったとはいえ、古来より或る一種の大瓜だけは栽培していた。大瓜はたいへんな利益をあげたため、各地でこの瓜は作られ、とても遠くまで販売された。それは中国南部で人を待つ間の趣向として、瓜の種を食べる風俗があり、また様々な茶菓子にはみな瓜の種を用い、そのため蒙古の大瓜は広く販売されていた。

この大瓜の栽培は、種を蒔いた後、毎日世話をしなければならず、秋の収穫に至るまでこれを守り続けねばならない。蒙古では家畜を放牧するため、瓜畑の守り番をしないと、牛などの家畜が瓜畑を通り被害を受けることもある。そして秋になると、瓜を栽培する家は、昼夜をとわず順番で畑を見回る。それは瓜が成熟する頃、狐や狸、穴熊、兎などが瓜を食べに来るからで、このような風俗習慣はずっと続いた。

清朝光緒九年、哲里木盟博王旗からほど近い康平県の北に貓子洞という所があり、その砂の丘に蒙古人の村落があった。ある年砂丘の高い所に瓜を植え、秋になって各家で順番に畑の番をし、ある時「希里模」という者が三、四匹の犬を連れ瓜畑に向かった。そして瓜畑に犬が先に着くと、突然一斉に白髪の老婆に噛みついた。老婆の叫び声を聞き、希里模がすばやく駆けつけると犬が吠えたてていた。希里模は知り合いの老婆の声を聞いたと思い犬を止め、振り返ると老婆は忽然と姿を消していた。そこで希里模は老婆が妖怪であったことを理解した。家に帰ると彼はこの奇怪な出来事を家人に話した。それから数十日過ぎたある日のこと、希里模の息子布彦図が夜間に瓜畑を見回りに出かける時、父の話した妖怪のことを思い出し、二歯の鉄鈎竿を手に持ち、犬を数匹連れていった。そして犬が先に瓜畑に着くと、犬が再び白髪の老婆を囲み、必死に噛みつくと、老婆が布彦図に助けを求め叫んだ。布彦図は助けを求める老婆の声に急いで駆けつけ、その様子を見ると老婆の相貌に邪気があるのを見て、敢然と勇気をふり絞り、犬を止めずに鉄鈎の歯を老婆の首にかけ押さえつけた。すると老婆は太った穴熊の姿を現し、彼はそれを打ち殺して村に持って帰った。村人は皆それを珍しそうに見に来て、穴熊は捌いて肉は食べ、毛皮は座布団として使用した。以来、穴熊について理解し、康平県などでは秋になると、人々は穴熊の洞穴を捜して捕えようとする風俗があった。

## 第四十一章　女子細工

蒙古族は古来よりの伝習で、家庭婦女の手仕事はみな母親が娘に伝授し学ぶものであった。女子は幼年より八、九才にかけて、母親は先ず靴下の縫い方を教え、そして作りあげた靴下を履かせた。一三、一四才になると母親は厳しく靴や靴下の作り方、そして採寸から裁断といった衣服の裁縫について教えた。一五、一六才になると、衣服・靴・靴下の裁縫はすべて習い、その他に様々な草や鳥、花の模様を靴に刺繍することも習う。こうして一六、一七才までに全身に関わる衣類や物を全て作ることができる女子が合格と見なされる。そのため蒙古では貧富を問わず、すべての女子は幼き頃より八、九才にかけて針仕事を習う。衣服材料である綢緞や糸は全て外来のものを購入するが、ひとり裁縫からその処理まで自ら成すのが蒙古の女のあり方である。

もし裕福な家の女子であれば、手習い用の糸でいろんな巾着を作ったり、服や袖口に刺繍を入れたり、春用と冬用の帽子を作ったりした。古

い時代には、三日月を戴き陽を遮る縁取りの帽子を男女とも被り、このような帽子は全て女子が作った。このように家の成員が身につける衣類はみなその家の母親と娘が一切を作っていた。ゆえに蒙古の風俗として、家の女子の手仕事の具合を見るなら、父子が身につける衣服帽子にされる刺繍や細工の出来を見ればその良し悪しが分かる。そして女たちが顔を合わせると、互いの身につける靴や衣服の出来栄えを見る。もし母親が拙劣であった場合には、ほかの上手な伯母や姉等に裁縫の仕方を教えて貰う。もともと蒙古では裁縫を専門に教える者はおらず、村に裁縫の上手な人がいれば、村に住む女子はみな習いに行き、作法から衣服或いは靴などの作り方を教えて貰った。そして息子に嫁を選ぶような時も、まず女の身につける服装を観察し、その出来具合を確かめる。そのため各家では、女子が刺繍と裁縫を一生懸命に習い、服や靴下巾着など蒙古人愛用のものを作る。そして蒙古の衣服の中で最も難しいのが、各種の細皮で袷の服の表を作ることである。縫製が上手くないと、両袖と腰まわりにしわが出て、着るにも苦しくなってしまう。だから蒙古の婦女で皮の袷が上手くできる者を第一の女工とする。そして各種の花鳥を刺繍できる婦女も重視される。さらに三日間で手早く靴下一足を作り、五日間で一足の靴を、一二日間で皮布の靴一足を作れる者が上手な人だとされる。このように衣服を作ることについては時間の制限はないが、靴と靴下の製作については時間を重視し、結婚する時には新婦が百足の靴と刺繍を施した巾着数十個を嫁入り道具にする女子が巧手な者とされる。

蒙古の婦女の手仕事は専ら身につける衣服や靴、靴下といった物を作り上げ、家ではその伝統が今に伝えられている。街に近い蒙古人は商人から新様式の靴や靴下を購入し使用するが、街から遠く離れる所ではみな昔ながらの習慣を守っている。

蒙古の生活においては、女性が一番苦労をする。家の食事と服装は全て婦女の労働に任されているため、婦女が労苦を一身に背負うのである。

## 第四十二章　狩猟

古き歴史より、専ら蒙古族は牧畜を業としたため、家畜を養い育て、仔馬や子羊、子牛が産まれる時、狼虎などの獣の害を受けるのを恐れ、各部落は近くの幾つかの部落が集まり協議をし、放牧される家畜の群を守るために狩猟をすることを決めた。四季に定期的に狩猟をおこない、部落の人数に基づき狩をする者の数を決め、十長・部落長・狩猟長と狩猟会長を選んだ。諸事は全て狩猟会長によって管理され、会長に選ばれる者はみな五十才を過ぎた者であった。部落の人数が多いところでは、狩猟会長を四名選び、小さな部落では二名を選んだ。そのほかに各部落で狩猟長を各一名を任命した。狩猟については数条の規則が設けられ、たいへん厳しくおこなわれた。もし狩猟の時に規則を違反する者がいたら、狩猟の後で狩猟会長等がその者について審理して罰を与える。そのために狩猟はたいへん整然と規律正しくおこなわれる。狩猟の季節になると、まず狩猟長は十長に命令を出し、どこの丘嶺を狩猟地とし、周囲六十里を範囲とし、卯刻より午未刻までにみなが指定の場所に違わず集まること等を十長に伝達した。その命令を受けた後、各部落長等は鞍馬と猟犬を備えて、各々食糧と飲水を携帯し時間通りに出発し、狩猟地へと向かう。そして狩猟地より十里ほど離れた所に着くと、見張りの者は狩猟長に集まったこと報告する。そして狩猟長は参加者に分散して隊形を取るよう旗を持って合図をすると、各方面より中心へ攻め込み、力を尽くして馬を走らせ獣を射殺する。たとえ親子であっても互いに競争し、援助者も中央で喚声を上げて助勢する。こうして槍や弓矢で獣を射殺し、猟を上手くする者は皆狩猟の中心に入るが、犬と鷹を使う者は外で援助

する。そのほかにもは徒する者がおり、傷を負って逃げようとする獣を打って捕える。こうして狩猟は申時に終了し、各部落長は分散して成果を点検し、狩猟長に報告した。狩猟長はまたそれを点検し、際だった活躍をし、良く猟をした者を褒め酒などを与え、その功績を讃えた。また、もし狩猟を好む者が互いに獲物の争奪を相譲らぬ時には、狩猟長は仕留めた獣を十五歩ほど離れた所に置き、それを目がけて徒者や少年に棒で投げるように命じ、三度目標に当てた者を勝者とし、獣もその人のものとした。このように獲物の争奪に関しては規則が定められていた。そしてまた、狩猟を見渡す狩猟長はその日の狩猟について、どう行動しどう良かったか強かったか、詳細に各部落の情況を観察し、良いところと悪い所を逐一指摘していく。この指摘を部落長は覚えて、部落の若者に行動の改善と規範を違反しないように教え、おこないの良い部落長はその功績が讃えられた。こうして狩猟長はすべてを整然と処理し、次の狩猟の日程を知らせ、各部落長は肉と酒を並べて、序列の順に座り飲食をしながら狩猟のことを話す。食事が終わると、互いに礼を尽くしそれぞれ家郷に帰っていく。毎年このような習慣があり、以来各部落では狩猟に行く者がいると、その家の妻子は夜間も参加した者の帰りを待っていた。門前にはとても高い灰の小山があり、各家の妻子はみなそこに立って家人の帰りを待ち眺める。そして家人が帰ってくると、遠くからでも成果があったかどうか分かる。もし狩猟が上手くいったなら、人馬は勇躍し、犬もその前後を跳ね回るが、もし狩猟が上手くいかなければ、人馬ともに疲れて犬もおとなしい。そうなると家人も出迎えず、獲物があれば子供も喜び笑顔で出迎え、妻も門前に立ち労いの挨拶をする。このような風俗が伝わったため、蒙古族は常食として鳥や鹿などの肉を食べ餓えを充たし、狩猟者が認められてきたのである。

狩猟は家畜を保護するために牧場から獣やその他の害を除く目的でおこなわれ、蒙古族は最も狩猟を愛してきた。このような風俗は、成吉思汗の時、各兵営を編成するにあたって、彼はまず各部落の狩猟長が定めた規則を推し量り、それを基に改編して部隊を編成した。

もともと狩猟者の規則には、みな名目があり規定もあった。

狩猟総会長が四名で、各部落には部落長一名がいる。部落長と呼ばれる者は、年が三十三才以上で、みな選挙で選ばれる。この部落長を選ぶ選挙は毎年春と秋の狩猟大会でおこなわれ、そこで議論をし、人馬が強く狩猟の指図が良い者を選び、総会長の面前で従う意思を示した者が部落長になる。各部落の部落長はみな狩猟大会でこのようにして選ばれた者である。

狩猟の規則としては、各自真っ直ぐに前進し混雑してはならない。そして前後に分かれ、両頭尾に分かれ、中央斜めなど各々進退路を決める。地勢山河によって随時進路を変えるが、それらはすべて狩猟会長の指揮に任せて、どこから進み、どこから後退するか順序よく動く。

狩猟の名目、狩猟への集まり方には定められた規格行状があり、それぞれ次のように排列した。

整頓狩頭、瞭望狩頭、前進狩頭、後退狩頭、闖入狩頭、探索狩頭、守防狩頭、追跡狩頭、放狩令、収狩令、駆旗頭、放犬手、放鷹手、放槍手、射弓手、散狩令、行狩令

このように頭等をはじめ夥しい隊列を組み、みな十数名から二十三、四名で、それぞれ首領が各隊列を動かし、連合して狩猟をする時には人数の多寡を確認して平均的に隊形をとり、偏らず歪まずに進んで狩猟をおこなう。狩猟は幾種類に分けられ、虎猟、鹿猟、狐狸猟、狼兎猟の四種類がある。例えば虎猟ならば十月一日から正月までを期間とし、狼猟なら二、三月中に、鹿猟なら五、六月中に、狐狸猟なら八、九月中にそれぞれおこなう。これは虎は十月の天気で山を駆け野で暴れとても凶暴

になり、狼は春の二、三月に子を産み叫び暴れ、食物を探す。そして鹿は夏の五、六月に角が生え替わり、狐狸は八、九月によく走れず、野草の種で目を打ったりする。このような獣の習性に従って四季に狩猟をするのである。

この種の狩猟の風俗は、成吉思汗の時、部隊の編成をするにあたって、狩猟の旧例を基に更改された。成吉思汗は蒙古の狩猟を高く評価し、また四季の所謂春猟、夏猟、秋猟、冬猟によって数条の規則を定めた。兵営部隊は毎年狩猟の季節になると、風でも雨でも、寒くても大雪でも、それに関わらず全ての兵を狩猟に行かせた。もし違反する者がいたら、軍法にかけて厳しく処罰した。長官たちはこの規則を遵守し実行するため、各部落の者もこれを守り、狩猟の風俗の伝統を失わなかった。今日でも蒙古では狩猟をすることがある。現在の狩猟は不完全とは雖も、みな成吉思汗の時代に定めた規則で春秋に狩猟をおこなう。

古代から大規模な狩猟をすることが重んじられ、国王自らが先頭に立ち、みなそれに従った。もし規模の小さい狩猟ならば、部落長が先頭に立って普段通りに部落の規範に基づき、決められた日にみなで狩猟をおこない、この習いで今に至っている。

古代蒙古族では、官庁を重視せずに「護喇拉」を重んじてきた。護喇拉とは蒙古語で集会の意味である。昔からどんなことがあっても、みな集会の時に解決してきた。命に関わる重要な事件なら、春と秋の大会で報告し、衆人の面前で処理してきた。このような習慣があるため、蒙古では社会の規則を最も重視し、狩猟で集まる時も、数多の訴訟を処理するわけである。

## 蒙古文漢訳　原稿第八冊

### 第四十三章　盟長旗務

蒙古ではもともと国境がはっきりしておらず、各族は放牧のため随時移住するため、境界線を重視してこなかった。而してこの風俗は、ただ部落を分けるために、属する民と長官が何部落の何郷村の者であるかが分かればよく、その各部落を王が管理していた。したがって何かあっても、部落と長官の名を言うことができればよかった。このような状況は大清に蒙古が属するまで続いた。この清朝が蒙古を管理するようになった康熙年間に、蒙古に長官制度を設立しようとした時、部落長官がいることを分かって、それを旗務署長に改称してそのまま用いようとした。名称も蒙古語を用い、官庁を札薩克と呼んだ。そして蒙古の旧習に基づいて、内外蒙古に分けて称し、それぞれに旗務所・盟長所を設立して、規範を定めて順次実行していった。こうして蒙古は内外各盟に分かれたのである。

外蒙古は喀爾喀を四つに分けて、四人の盟長を任命し、全部で五十七旗があり、それぞれに旗主がいた。そこに札薩克を一ヶ所設立して、旗の公務を処理した。

喀爾喀の東部は「喀魯倫巴爾斯和屯」盟で、車臣汗部の十六の旗からなる盟である。

北部は「汗阿烏蘭」盟で、図謝業図汗部の十八旗が一つの盟になっている。

中部は「斎斎爾里克」盟で、賽音諾顔部の十二の旗が一つの盟になっている。

西部は「畢都里雅」「納爾」「札哈告爾伊克」盟で、扎薩克図汗の十一

旗が一つの盟になっている。

このように規模が定められて以来、喀爾喀各旗の主な家族は繁栄し、兄弟が財産を分けて居を別に移したため、各旗には分旗が出現し、また札薩克を設置した。そして光緒年間に至ると、喀爾喀の四部には分かれ出た分旗が増え、八十六の旗となった。

外蒙古では盟長と各四部の名称は変わらなかったが、旗の名称は随時変わっていった。

そして内蒙古には六つの盟が設立され、全部で四十九の旗があった。

東部蒙古は「哲里木盟」といい、十の旗を管轄して一つの盟とした。

科爾沁右翼中旗の名称は図什業図旗　科爾沁右翼前旗の名称は札薩図旗
科爾沁右翼後旗の名称は蘇鄂公旗　科爾沁左翼中旗の名称は達尓罕旗
科爾沁左翼前旗の名称は賓図王旗　科爾沁左翼後旗の名称は博王旗
杜爾伯特旗　札賴特旗　郭爾羅斯前旗　郭爾羅斯後旗

以上、この十旗で一つの盟になる。

卓索図盟は内を二部に分け、五つの旗が一つの盟となり、中に放牧のための一旗が附く。

喀喇沁中旗の名称は喀喇沁王旗　喀喇沁右翼の名称は馬公旗
喀喇沁左翼の名称は呉公旗　土默特右翼前旗の名称は土默特旗
土默特左翼の名称は蒙古鎮旗　放牧の旗の名称は唐古特喀尓喀旗

以上、この六旗で一つの盟になる。

昭烏達盟は内を八部に分け、十一の旗からなる。

敖漢旗　奈曼旗　巴林右旗　巴林左旗　扎魯特右旗　扎魯特左旗　阿魯科爾沁旗　翁牛特左旗　翁牛特右旗　克什克騰右旗　超哈爾喀爾喀旗

この範囲内には小庫倫が附く。錫埒図扎薩克喇嘛放牧一旗。

烏蘭察布盟は四部に分かれ六旗からなる一盟をなす。

四子部落旗　茂明安旗　喀爾喀右翼旗　烏喇特前旗　烏喇特中旗　烏喇特後旗

伊克昭盟は二部七旗から一盟をなす。

鄂爾多斯左翼中旗　鄂爾多斯右翼前旗　鄂爾多斯左翼後旗　鄂爾多斯左翼分旗　鄂爾多斯右翼後末旗　鄂爾多斯右翼中旗　鄂爾多斯右翼後旗

錫林郭勒盟は五部十旗から一旗をなす

烏珠穆沁右旗　烏珠穆沁左旗　浩齊特右旗　浩齊特左旗　蘇尼特右旗
蘇尼特左旗　阿巴海右旗　阿巴海左旗　阿巴噶納爾右旗　阿巴噶納爾右旗

察哈爾八旗の内は左翼四旗と右翼四旗に分かれたが、元々は放牧場であった。察哈爾区域内の「達里岡」という所に牧場があり、三つの部落が定着していたが、そこに土默特左右翼の二旗がある。

阿爾泰の西套には、蒙古の旧土である爾扈特二部十六旗が一つの盟となり、名称は青色哲勒克図盟である。

青海額魯特蒙古の内は七部が雑居して、唐努烏梁海の二部三十六旗が一つの盟になり、正・副二名の盟長がいる。昔は各部落が連なって科布多に属し、その範囲内の盟の名称であった。

賽音済雅哈図盟はその内に輝特族の二旗と明阿特の一旗、札哈郭の一旗が附いており、みな甚だ遠く離れ散居しており、各旗主は属する近くの官庁に通った。青海と科布多といった地方の蒙古の旗は以上のようである。

青海区域の範囲外にさらに和碩特蒙古の各旗および唐古特があり、蒙古語で言うところの「土司」がいる。これはみな盟長はいないが旗主はいて、甘粛省の範囲にあるが、甘粛省の管轄には属さない。但し阿拉善額魯特蒙古一旗と額済納の旧土屈特蒙古一旗はこの外となる。

呼倫貝爾額魯特三旗は所謂満洲の布都哈族の者で、全部で十六旗があり、盟長はいないが副都統が一名いて、十六の旗を管轄し事務を処理す

る。官庁は海拉爾にある。この外の満洲八旗というのは、東三省および北京に居住しており、蒙古が満洲という名称に変更してから、満・蒙・漢各族を編入したため八旗に編成した。而して旗の具体的な数を明確に調べた者もおらず、そこで満州八旗ということにした。

所謂旗の範囲は県と同じだが、ただ内外蒙古の旗の範囲は広大で、面積は異なる。そして蒙古族には二種類の貴族があって、一つが台吉族で、一つは塔布囊族である。この二族の者は古来部落長官で、帰属する人口が増えたために枝分かれし、その際に財産を分けてほかに居住した。そして戸数が一万戸に達すると一旗を編成するが、達しなければ旗にはなれないことになっている。

本来旗を編成する規範としては、人口数により官吏の額を決めるが、台吉族と塔布囊族が世襲する正旗主以外に、部落長・五十家長は旗務処札薩克印務協理職まで昇進できる。

そして官吏の位で一番低いのは十家長で、蒙古語では「達如個」という。達如個は管旗章京までは昇進できるが、それより高い地位に昇進できることはない。

蒙古語で札薩克というのは、公署の意味である。

蒙古の公署が定める職員額数の規則は以下の表の通りである。

| （左は次を為す） | 正位旗主 | （右は上を為す） |
|---|---|---|
| 管旗・章京一名 | | 印務・協理一名 |
| 管旗・梅林一名 | | 副印務・協理一名 |
| 副事務・章京一名 | | 印務・梅林一名 |
| 筆帖式・長一名 | | 印務・札藍一名 |

この表は旗主と職員を表したもので、合わせて額九名の正職を記した。

そして公署堂官を除き、その他に筆帖式という印務書記を参領が定め、旗に幾人かを置いた。参領印務所にも幾人かの正筆帖式がいた。また見習いの筆帖式は何人とは決まっておらず、随時席に空きができると登用された。この他に分かれてできた部落を治めるために、「札藍」と呼ばれる旗の職員もいた。また参領は六百六十戸を範囲として、大小の如何を問わず裁判を引き受け、その一切の処理にあたった。この参領の下には四名の「章京」職がおかれ、その章京職の下に四名の「坤都」職がおかれた。さらにその下には「伯什戸」四名と「達如個」四名の役人がおかれた。このように参領職は四名の章京と四名の坤都四名、伯什戸・達如個八名といった役人を率いていたのである。

またこの参領は管轄する六百六十戸に対し、常に百五十名の兵丁を備えさせていた。参領とは雖もそのあり方は甲乙に分かれるが、昇進し参領職に就いた者は本署の正堂における席順や、あるいは公の会議における席順などは、みな参領が按配する。

階級序列表　　民族応陞の職

定められた階級者

管旗章京　一等

管理梅林　二等

事務長堂官　三等

印務筆帖式長　四等

札藍　五等　参領同じ

章京　六等

坤都　七等

伯什戸　八等

達如個　九等

台吉及び塔布囊族人

爵位職表　　年次位分

親王

郡王

貝勒

貝子

国公

協理

王公や貝勒・貝子、そして協理等の公爵の範囲は一般の者とは関係ない。もし一般の者が職にあって昇任し梅林になるためには、兵を率いて国のために出陣し亡くなり、その後で戦功を省察され、それに相応しい時にその位に就くことになる。世襲で公爵となった者は更に進み、その名前だけで四等台吉族に位することになる。一般の者の昇任は国のために命を賭して軍功をたてても、貴族爵位の列には入ることができないのである。

このように蒙古における官員職や爵位については、その規模や旗の範囲の大小によっても分かれ、参領職の数も旗の人口の多寡によって決められるのである。

## 第四十四章　会合相撲

古より伝わり来る風俗の一つに、各部落で年の終わりに祭祀或いは会合がある時、相撲が最も尊ばれることがある。こうして伝承された習慣は変遷しながら、各部落で会合があればみな幾人かは相撲を取る者があった。相撲取りを蒙古語では布夫と呼んだ。やがて部落内の相撲上手な者を布夫と称するようになると、それからは各部落長官の会合があれば長官に連れられ、盟の会合がおこなわれるところへ帯同した。長官たちは会議の事務を処理し終えると、布夫を相撲で相闘わせて、各部落の青年たちの身体の壮健さを見る。盟長と各部落の長官は一緒に相撲を見て楽しみ、取り終えた相撲取りの勇猛さに一時の爽快さを思い、この布布について一同相談がまとまり請訓した。

こうして総会盟長は相撲して差し支えがないかどうか、その可否について問い、盟長は各部落長官に何人の布夫がいるかを詳しく聞いた。そして会合の後に相撲をおこなって武芸を比べ、みなで楽しむのはたいへん良いことではあるが、試合ならば必ず勝者と敗者が出るので、熱中しすぎることを慎むよう盟長は各長官に命じた。各長官はそれを布夫たちよく言って聞かせ、相撲で仇を為すようなことにならないようにと教導した。そして布夫が相撲を取る時、相手が両手を放し垂れるまま立ったら、忠告して止めなければならない。これは相撲の規則である。規則に従わない者がいれば、勝負に関わらず鞭を数十回打って処罰する。自らの力で相撲を取り組み合い、強者は賞を得るが、弱者も羞ずることはない。みな意を通わせ闘うのである。衆人は会合相撲を見て、その勇猛さを楽しむ。だからこそ長官は相撲により怨恨が生まれることを慎み、それを注意深く防ぐ。そして様々なとり決めをした後布夫は会場に入るが、その前に、盟長が相撲について左のような数条の詞を、みなの前で読み命令する。

一、布夫は甚だ重要な役割をもつ者で、男子は鍛錬を重ね全身強く壮健であり、みな身体血気にして勇しく武に長けている。

一、布夫は全身を錬成し、勇猛にして相撲に長けた者である。著名な布夫は部落の名誉に関わるだけでなく、国風の振興ともなる。

一、布夫は毎回の会議と宴会において衆人の面前で誠意をもって相

撲を取り力を比べ、邪心を持たずに力で勝負する。布夫の相撲は面白いだけでなく、観客に勇気を与え感動させる。それは青年に良き勇気を伝えいつまでも尊敬される。それゆえに盟主・会長・領袖・各部落長官は話し合い、青年の体格や強弱の真偽を試験し、選び抜かれた良き相撲取りを布夫と称する。

定立する布夫の賞品の例

頭等布夫　良馬一頭と生地・煙草・酒など五種の賞品を与える。

二等布夫　肥牛一頭と上記三種の賞品を与える。

三等布夫　肥羊一匹と上記二種の賞品を与える。

上のような命令が下された後、布夫の世話役六名が二つに分かれて場内に入る。呼厭は布夫を引導して場内に立たせ、導斎は場内に入る布夫の名を呼び唄い喚声を挙げる。塔撒は相撲の勝敗を判定して、詳細に長官に報告する。

布夫には一種の規則がある。さらに練達を伝授し、日常的に躰を鍛え闘いにむけ、手を取る・抱える・まわる・踏む・捕まえる・投げつける・飛ぶ・脚をすくうといったことを重んじ訓練する。そして布夫は場内に入ると腰を落とし虎のように体を揺する。相手と組み合う時は獅子が頭を振るような動作をする。また勝利を得て退出する時、両手を広げて大鳥のように舞って長官の前に来て、賞品を受け取り休息所に退く。

蒙古の布夫による会合相撲の情況は以上のようである。

それから成吉思汗の時代に至り、兵士を募り軍隊を編成するようになると、各部落に昔からある会合で、青年達は相撲をとって互いの体の強さを比べた。成吉思汗は、それが少年達を激励し、武勇の道に励むことになると考え、布夫たちを特に奨励し奉官させた。それ以後各部落ではみな鍛錬を積ませ布夫たちの団体を結成した。そして長官は勇猛にして十八歳未満の者を選びそこへ送り、試合場で力を検査し合格した者の名を記して上司に報告した。そこでさらに選ばれた布夫が正銘布夫と言われる。こうして奉官する正銘布夫は、年に四度国より報償され、若者はみな良い布夫となる。

布夫になれるのは十八歳から五十歳までと定められ、期間が満了すると脱退する。この規則はずっと守られ、布夫を更改することはなかった。こうして各部落には必ず幾人かの布夫がいた。この風習は清朝に至って、蒙古の部落が旗務所に改称されてから、各部落長官は叅領の欠員を改編する際、布夫の不足も按配され、一人の叅領の下に正銘布夫二名と準布夫一名を置くよう定めた。範囲の大きな旗では叅領の人数が二十四名、布夫四十八名を置くが、小さな旗では叅領が四名ほどであった。いずれにせよ叅領の人数により布夫の数は決められていた。このほかに各部落にも布夫がいるが、これは奉官する布布ではない。

昔から社会で会合があれば、必ず布夫の相撲が熱狂的な興味をもっておこなわれた。それはいわば習慣であり、蒙古では老若男女を問わずみな布夫の相撲を愛で、王公府院から民間一般社会まで布夫のために応援し、武勇を勝ち得た者に慶賀の宴を催す。もはやこの布夫の相撲の外に観る者の勇気を鼓舞する楽しみはなく、婦女少年から貴族にいたるまでこれを最も愛し、某かの宴をどこかで催し、布夫がどのような褒美を得たかという話を常にしている。

このような状況であったため、もし旗主や王公に婚礼の宴でもあれば、各旗主は親交のある友、或いは旗主や官吏代表はみな布夫を何名かを帯同し婚礼の祝いにやって来る。そして酒食の宴の後、親友や官吏が集まり布夫の相撲を見て楽しむ。布夫が試合に臨む前には、家の主人は招待者にたいして先ず布夫の属する旗、旗主或いは盟長の爵位を調べ、爵位

の高低によって順番を按配し、布夫と呼厥にそれを言い渡した後、試合は始められる。そしてもし盟主の布夫が出場するならば、別の下位に属する旗の布夫は、たとえ気力が相当であっても注意を加え、情に譲り盟主の布夫を倒すことはできない。また旗主の爵位が等しい場合は、布夫の持つ力で勝ちを取りにいく。このように規則の定めにしたがって官吏たちはその序列に応じた順番に座るほか、その妻や娘などの婦女は会場の左側、官吏は右側にそれぞれ座り、ほかの男女は会場を囲むように座る。そして試合の世話役が布夫の人員を確認して後、道斎は声を出して歌を唄い、出場する布夫の名を呼びあげ相撲が始まる。こうして著名な布夫や強き布夫は勝利を得ると、長官から賞を貰うほかに官吏の妻と娘から特別な賞品として、靴や靴下、巾着、手拭いなどを貰う。また官吏から貰う賞品は牛や馬、羊、煙草、酒の類であり、相撲の強い布夫の賞品は甚だ多く、観客もみな歓声を挙げて祝う。このように蒙古長官の家の結婚の宴でおこなわれる相撲は盛大である。

そして毎々宴会と会合の時に、議事を司る盟長は旗の事務を処理するが、その時も布夫の相撲がある。もし旗主の爵位が上がったり、あるいは旗主と王公が六十一歳となって長寿の祝いをする時、往来のある親友や官吏は礼節をもって贈り物をするほかに、相撲の試合を用意して、特に好意をこめて祝う気持ちを表す。したがってもし遠くに住む親戚に祝事がある時、旗内に著名な布夫がいなければ、ほかの旗へ赴き著名な布夫を借用し、親戚の所に送り祝いをする。このため著名な布夫が輩出される地方について定説がある。

内蒙古哲理木盟図什業図主旗にはよく著名な布夫が出る。
同盟の南郭爾羅斯旗にはよく著名な布夫が出る。
内蒙古錫林郭勒盟烏珠穆沁旗と蘇尼特旗にはよく著名な布夫が出る。
外蒙古図謝業図汗部には著名な布夫が出る。
外蒙古喀爾喀札薩克図汗などで著名な布夫がよく出る。

後に蒙古で喇嘛教が隆盛になって以来、喇嘛布夫も現れた。大きな喇嘛寺廟には、数百名の喇嘛僧が住んでおり、みな数名の喇嘛布夫がいた。寺院では法の規則で一年の祭祀が定められ、経を誦え道場の大会をおこなう。この法事を終えると、喇嘛布夫の相撲が催され、布夫の闘う気力を観ることは、僧侶の遊びであり、寺廟の威風を増す意味もあった。それは身体を壮健に保つため、よく運動を為し、飲食を満遍なく慎み、病気を防ぐために強く血気を養うためでもあった。そのため毎年の道場において喇嘛僧も相撲をとる。これが廟会相撲である。

昔から各部落の定められた集会と宴会の時には、布夫が集まり来て相撲を取るため、各部落の長官はよく布夫のことで競い争い、自己の布夫に肩入れをし、勝敗と賞品について相譲らず、大勢が双方で衝突する大事件にもなるし、仲立ちする者の努力で和解する場合もある。このように布夫のために長官同士が仇となることも甚だ多いため、布夫たちは相撲を取るときにも注意を加えておこなう。

蒙古各旗には今も布夫がいるが、みなかつてのようではない。内蒙古卓索図盟内の各旗の布夫は有名無実となったが、このほかの旗盟では四季の祭祀には必ず布夫の相撲があり、昔の通りおこなわれている。

## 第四十五章　廟会布礼

仏教廟会において喇嘛僧は、跳布札をおこなう。俗に「打鬼」と称し、元来は蒙古の風俗ではなかった。

蒙古に喇嘛教が入るのは、元朝時代に西蔵喇嘛である箔克巴を招請してからのことである。その始まりの頃は喇嘛廟も多くなく稀であったが、後の清朝康熙と乾隆年間に蒙古と西蔵のために朝廷は喇嘛廟寺院を設立

し奉官させた。そして喇嘛教の布教のために北京、熱河、瀋陽、五台山、西安府、多倫納爾などに喇嘛寺廟を築き、国家のために読経させた。このような官廟では一年に期を定め、廟ではみな読経の道場をおこなう。また喇嘛廟に住む喇嘛僧のかかる費用と食糧についても定例にしたがって、廟に住み込む僧侶の人数分の定額が官庁によって賄われる。毎年の定期におこなわれる道場の時には、各地方寺院の喇嘛僧が上院の大廟に集まり、同じく経を誦える。この道場では、国の安泰と民の安寧のために三日の間読経するが、これは官立の道場である。そのほかに内蒙古と外蒙古の各旗では官立喇嘛寺廟に習って読経をするが、善道なる旗主もみな私的に喇嘛廟を一所建て、気ままに暮らす者を招き喇嘛僧にさせ、専ら西蔵文字を習い、仏教経典を学ばせた。各喇嘛寺廟の宗旨とすべての規則は、全て西蔵拉薩寺の定めたものをもって実行された。

そして清朝において初めて喇嘛教を広める時、旧例の喇嘛暦に応じて仏教の規則に当然従わなければならず、北京で第一の大廟である雍和宮の道場の期日はみな拉薩寺と同じで、毎年正月三十日に道場が開かれ、二月二日に至るまで読経があげられる三日間の道場大会である。この道場大会の読経二日目の二月一日には、喇嘛僧は法衣を纏い、道場にある楹を廻って布札を跳び舞う。その日朝廷から侍衛を帯同した一位散秩大臣が派遣され、道場で経を聴き喇嘛僧が跳び舞う布札を見て魔除けとする。これは仏教官吏の定例であり、理藩院で喇嘛教に関する事務が処理されるようになって以来、毎年二月一日に北京にある各喇嘛廟はみな雍和宮の道場に集まり、読経し布札を跳び舞い祟りを送り出す。これも習慣であり、喇嘛教の中では布札を跳び舞う道場大会が最も重視される。

西蔵拉薩寺では毎年二月一日に、各寺廟の喇嘛僧がみな拉薩寺道場大会に集まり読経し、布札を跳び舞い祟りを送ると元々定められていた。こうして各地に喇嘛寺廟が設けられたが、喇嘛僧の数が五百名に達した寺廟では、年に一回布札を跳び舞う道場を行う。これはみな拉薩寺から伝わり広がったものである。

この喇嘛寺でおこなう道場で布札を跳び舞う期日は各地方で不定期である。その情形はみな拉薩寺の定例に従うが、期日は異なり定まっておらず、正月十三、十四、十五の三日間おこなうと定めた所もあれば、二月一日におこなうと定めた所もある。ほかにも六月十四、十五、十六の三日間でおこなう所もある。このように道場で跳び舞う布札の規則や一切の装飾、祝詞、読経法は一律であるが、各所の寺廟が定めた期日が異なる。この各寺院によって期日が異なるのには個別の事情がある。それは廟の落成記念や、住持の記念日などにこの道場を合わせるためで、故に各地方の喇嘛寺廟では、同じ宗旨で布札を跳び踊ると雖も、その期日は異なるのである。

この喇嘛僧によって伝えられた仏教に従って、寺廟の定める毎年の道場や読経、跳び舞う布札は、二つの形に分けられる。一つは釈迦佛時代の道場布札で、もう一つは西蔵に初めて築かれた拉薩寺時代の道場読経布札である。

古代の印度国で、第一世釈迦佛が初めて人間の世界に生まれ、衆生のために説教し、人間の有する七情六欲を説いた。釈迦佛は佛法をもって諸世に光明をもたらし、一切の世界を震動させ衆生を感化無量した。その妙意尽くさずして釈迦佛が世を去った後、門徒の阿難達はまずほかの衆徒と佛舎利を敬い清浄し、みなと話し合って王舎城北の耆闍堀山中に宝塔一座を築き納めた。この塔の名は印度語で「那喇哈就達」という。仏舎利を供養するこの塔を築く時、一頭の大象が土木や煉瓦、石、水などを運んだ、工程が完全に竣工した後、吉日を選び各地の仏門の弟子がみな塔の前に集まり、開光道場を開き読経し舎利を塔の中に安置して、塔の前で祝った。そして布施をなし尽力して善く助けた施主から事務、

職人に至るまで、塔を建てた功績によってみな名号を授かった。このように諸事一切を終えたが、ただ運搬に使用した象の力を僧たちは忘れ去っていた。こうして僧侶や人々がみな塔の竣工式を終え居なくなった三日後、象は塔の前にやって来て、大声で三回吼え、猛烈な力で塔の西側の一角を押し倒した。その後「摩訶迦葉師」は霊法を用いて、この象が修塔の力を労われず功績も認められず、それに憤怒し塔を押し倒したことを察知した。摩訶迦葉師は深慮し、法力をもって朱文字で「阿喇喳瓦爾達」と呪文を書き、それを象の鼻に貼って恨みを解き鎮めた。また来世にこの象が魔門に生まれ変わることを恐れ、仏教に害をなさぬために憤怒の象のために時々経を誦えた。

後のある時、一世釈迦佛が現世に降臨し八十四歳の時、同胞にして弟子である「覿瓦靼撻」という者が、生来善行に大きく反し功徳を専ら害し、任意に仏塔寺院を破壊していた。釈迦佛は彼の前世での原魂は暴れ象で、今人間として生まれ変わっても性悪の縁は解決されず、悪しき行動も暴れるのもそのためと察した。釈迦佛はもろもろの比丘に、邪悪な魔を駆除するには道場を開いて経を誦え、布札を跳び舞わねばならないと説いた。そして釈迦佛は覿瓦靼撻を指定し道場の準備を担当させ、期日を決めさせ道場を開き、経を誦え布札を踊り、その邪悪な魔を消滅させ祟りを送った。こうして道場と読経、布札をおこなうことは定例となり、今に伝えられてきた。これは印度で初めに起こり、覿瓦靼撻を済度するためにおこなった道場と読経、踊りが始まりである。

西蔵喇嘛教でおこなわれる道場と読経、布札は印度と同じではない。西蔵の喇嘛僧がおこなう道場布札は「蘇隆贊堪布汗」の時代に起源する。蘇隆贊堪布は西蔵を開化し仏教を興す時、「嘎爾嘛脱他」という者を印度に勅使として派遣し、釈迦佛時代の旧跡を調査するよう命じた。ある日、嘎爾嘛脱他は佛が在世において説教した所に行き、そこで白檀の木を取ろうとした時、象の群を見た。その内の一頭の象の鼻に朱写された「阿喇喳瓦爾達」という字があり、その象はたいそう白檀木を欲しがり、そこをなかなか離れなかった。そして嘎爾嘛脱他は白檀木を取り西蔵に戻り、その件を蘇隆贊堪布に報告した。汗はそれを聞き、象の理由を考え理解した。その象の鼻に今に至るまである朱写された字は旧時のものであり、故に済度するのも難しくないはずであると。昔年の我等が先祖は印度で塔を竣工した時、象の労力に対する功績を忘れさり、象はそれに怨恨を抱き未解であった。それを今再び済度しなければならないと考えた。こうして汗は嘎爾嘛脱他に命じ、自ら工事を監視して喇巴隆に喇薩寺を築造し、その様式一切は印度式に習い、白檀木で釈迦佛の本像を彫像させた。嘎爾嘛脱他は命令を受けて領主となり、喇薩寺の工事に尽くし、三年の工程を経て完成した。そして吉日を選び本尊を安置し喇薩寺の開眼式をおこなった。その祝賀のために各地方から善く助けた施主等が集まり、喇薩寺の大開道場会で読経し、参列し潔斎した。事務職の喇嘛僧はみなその労力に基づいて表に記、序列を明らかにして名を留めた。こうして喇薩寺正殿の白檀佛の前において喇嘛僧がそろった時、位の高い僧侶を名簿にしたがって読み上げ、佛にたいして読経し皆それぞれ善き縁を受け、それに応じた職位を与えられ満足し喜んだ。そして人々は十方経を誦えた。

十方諸佛国　盡是法王家
偏求有縁地　翼得早無邪
八功如意水　七宝自然華
於彼心能係　當必往非賒

すべての衆生が安楽の国に往生することを共に願い、この喇薩寺は善き縁を引導する道場の地となった。

すべての僧侶俗人が声をそろえてこの十方経を誦え佛前に拝み、寺院

を三周廻る。この道場は三日間で終わり、それぞれ帰っていった。その後のある早朝、一頭の大きな黒牛が喇薩寺にやって来て、前足を跪き三度大声で吼えると、寺の西柱に力いっぱいぶつかって死んでしまった。喇薩寺事務所の喇嘛僧は、この事件を管理寺務長の堪布喇嘛に報告した。そして堪布喇嘛等はこの柱にぶつかり死んだ黒牛について詳しく調べ、この黒牛はもともと喇薩寺築造の時に使われ、水や木などの荷駄を運ぶために車を牽いていた。そして竣工し開眼祝賀の時には、誰一人黒牛の喇薩寺築造のための労苦を讃えることがなかった。人々は牛をただの畜生と見、この牛が人の気持ちによく通ずるとは思わなかった。喇嘛僧たちはみな黒牛の死を惜しみ、その甚大な無念さに報いるべく、喇薩寺では以後黒牛の肉を食べることを禁忌とした。そして黒牛の死んだ日に紀年道場を開き、十方経を一日誦えるよう定めた。それから多年を経て、西蔵王「達頼粛賓汗」が「隆那嘛」という者に殺され、自ら権力を握ると、以来悪事の限りを尽くし、幼女淫姦、暴殺無道の振る舞いをおこなった。そして専ら寺廟を壊し焼き、喇嘛僧と見れば殺し、西蔵国内は乱暴の極みで塗炭無き所となり、人々は逃げ惑い、苦情言い難き状況にあった。その時「喇哈龍之処」という所に、巴拉多爾吉という者がおり、彼は隆那麻が君を殺し権力を握り、悪行三昧の害を人々が甚大に被るのを見て、沐浴潔斎し七日間経を誦え、法力で隆那嘛の前世が一頭の大きな黒牛であることを察知した。そして今生において高官の一門に生まれ得て、怨恨を報復するために悪行を尽くしたと知った。こうして隆那嘛は一年あまり暴挙をおこない、人命を落とした者も甚だ多く、破壊された寺廟も百余にのぼった。このように悪事の限りを尽くす隆那嘛を処罰するために、巴拉多爾吉は仮装して、袖に矢を隠して隆那嘛を訪れた。その時丁度隆那嘛は大酔いしており、巴拉多爾吉はその前に進み出ると矢を隆那嘛の喉に穿ち命を奪った。巴拉多爾吉は、兵士が隆那嘛の死んだ事情を分からぬうちに、急いで馬に乗ってその場を脱した。その後巴拉多爾吉は全西蔵の各部落にすでに隆那嘛が死んだことを通告し、また布告を出して、隆那嘛の原魂は前世一頭の黒牛であり、その怨恨を晴らすために人間に生まれ変わり、人道に外れた暴挙を尽くしたと、詳細な経緯をみなに知らせた。そして今、吾巴拉多爾吉が佛法神の助けによって敢えて狼獨爾馬隆那嘛を滅ぼし、人々の害を除いたと。以後人々は安心し患うことなく、青天の光の如く見える日々を過ごせるであろうと言った。人々はこの詳細に書かれた布告を見て皆非常に喜び、各地に避難した者や山深く修行に入った者もみな喇薩寺に集まり、急いで会議をおこない達頼粛賓汗の長男を王に即位させた。そして喇薩寺の喇嘛僧たちは巴拉多爾吉を聘来し無量恩師と呼んだ。各寺院の齢を重ねた喇嘛僧たちは読経し、年長の官員たちも隆那嘛の悪行暴挙残忍の極みであった悪政下で寒心したため、この喇薩寺の僧侶たちはみなで相談し、仏教の原来の歴史を調べ、経典博学にして法力の高い者数名を選び招き、その法師等は専ら仏教に害を無くし魔を除くための方法を捜した。そして隆那嘛の原魂は「狼獨爾馬」というが、その殺された日に道場を開き、布札を跳び舞い読経することにした。毎年二月一日をその日と定め、道場で読経し布札を跳び舞い、狼獨爾馬の鬼魂を鎮め送る。この大道場読経会を、俗に「西蔵喇嘛打鬼会」とも称する。西蔵語の狼獨爾馬は、牛魔という意味で、牛魔が転じて人間となり隆那嘛と称し、国王を殺して悪行の極みをもって西蔵の人々と僧侶に害を与え、そのたいへんな苦しみ故に、それを紀念し道場を開き、読経し布札を跳び舞い、狼獨爾馬の魂を滅ぼし去らせ、二度と生まれ変わらぬようにとの意をもって伝来した。喇嘛教の道場でおこなわれる布札は、専ら狼獨爾馬のためである。

この西蔵喇嘛教の道場布札には経法に定められた規則がある。それによれば道場の壇を廻って跳び舞い布札をする者は諸神を尊ぶ。定められ

た人数でそれぞれ口中で呪文を誦え、法衣を纏って鎧を付け、顔を五色に塗る。そして狼獨爾馬の体を模して、五種類の食糧を牛と羊の血を混ぜて麺にし、目鼻と手足、五臓を全て作り、生きているようにする。このように狼獨爾馬を模して麺で作られた体を「霊嘎」と呼び、とても重要なものとされる。そして毎回の道場布札において霊嘎を麺で作る時、たくさん秘密の材料を使用して、外の人間にはその作り方を知らせない。このように厳かな霊嘎ができあがった後、できあがった霊嘎に再び魂がつかぬように七日間は絶えず喇嘛僧が順番で経を誦える。そして七日間が満了すると、喇嘛僧は法衣を纏って諸神の格好をし、霊嘎を供えた壇の周りを跳び舞いながら廻る。

諸神は以下の通りである。

天公神尊一位　　地母神尊一位
七政陰陽神尊一位　　四大天王四位
白と緑の菩薩二十一位　　十方主愛児女王一位と諸児
地支十二時神十二位　　魁星神一位
閻羅王一位　　十八羅漢全位
八大慈慧菩薩　　鬼崇蝴蝶十二個
空白骨鬼頭八個　　黒鬼花瞼鬼四個

全部で九十九位の神鬼の外、百二十位の神佛尊を壇上に揃う。この道場読経布札の各神鬼は、道法の規格によって按配された霊嘎を廻って跳び舞うが、その時まず閻羅王は月斧を手に提げ、霊嘎を五つに割り裂き、そして魁星神が舞い来て五つになった霊嘎を五方向に分ける。そして蝴蝶鬼と白骨頭鬼は分かれた霊嘎を奪って八方に捨て去る。この時喇嘛僧僧たちはそろって経を誦え、法器を鳴らし祟りを鎮め送る。喇嘛教の道場布札の内容と情形及びそのやり方と規模は、すべて魔の患いを除ける意が真の目的である。